母のひろば702号　2022年11月15日発行

母のひろば 702

doshinsha / haha no hiroba

子どものそばにある短歌⑦／千葉聡　2
作家と画家があうとき③
『むしたちのうんどうかい』／得田之久　3
「おかあさんとみる性の本」30周年記念インタビュー／和歌山静子　4
わたしの原風景㉝／西巻茅子　6
新刊紹介／最上一平　7

イラスト／北村裕花

絵本原画展に思う

とよたかずひこ

ドサッ。立ち読みしている私のそばに、崎陽軒（きようけん）のシウマイ弁当が補充されるがごとく、重量感のある図録が積み上げられた。そのまわりにはマグカップ、グラス、絵皿、Tシャツ、クリアファイル……膨大な数のグッズが並んでいる。客はスーパーにあるような買い物カゴに、ひょいひょいと品物を入れてレジの前へ。長蛇の列ができている。

今をときめくヨシタケシンスケ展を観てきた。雨降りの平日、人出は少ないだろうと見込んで行ったのに、会場の世田谷文学館は大賑わい。絵本の原画展でこんなに人が集まる企画はめったにない。内容も画期的で、サービス精神旺盛、来た人を飽きさせない仕かけがしっかりできていた。立体、映像を駆使して小さい人たちも参加できる遊具もあって、じいちゃんひとり、子どもたちに混じって順番待ち、リンゴも投げてみる(笑)。「じごくのトゲトゲいす」にもこわごわ座り「てんごくのふかふかみち」も歩いてみる。ホホウ、こんな感じかあ、よくできている。

絵本の原画展に私は一定の距離を置いてきた。本の形になったものが作品であり商品であるという考えだ。絵は必ず経年劣化する。展覧会のために、もう一度お化粧をして、あたかも今、仕上がった原画のようにして見せるのに違和感がある。一作品完成すれば、原画ごと編集者とのやり取り資料も含めて大きな紙袋に放り込んでおしまい、とする私のやり方は原画展にはそぐわない。が、そんな私にも、時たま原画の展示を、との要請がある。ぜいたくな場所を提供していただきながらも、残り少ない人生時間、新作創りのエネルギーを会場創りの労力に削（そ）がれはしないかと思い悩む。

コロナ禍以前、とある地方での幼児向け親子一緒の読みきかせ会終了後、女子高生を連れたお母さんが問うてきた。「この子、絵本作家になりたいと言っているんですが、美術大学に行かせた方がいいんでしょうか？」経済的余裕のある家庭なのだろう。「なれるかどうかは別にして、美術を幅広く学べる場に行けることは幸せだと思う」と答えた。私は我流で何となく今までやってきたが、音楽とかスポーツと同じように美術も土台作りをおろそかにしてはいけない。

『みかんくんがね‥』が刊行された。特色指定描き分け版という手法で、私の原画もモノクロである。ヨシタケ氏も言う――原画を並べるだけでは場がもたない――そこから彼の空間創りが始まったのであろう。地道に基礎を学んだ上で、ユーモアと楽しさを兼ね備えた独自の世界を展開している、ひとつのお手本を見た。

（絵本作家）

子どものそばにある短歌 7

思いがけないプレゼント　千葉聡

誕生日カードをあなたへ書くときの蛍光ペンの乾く速さよ

千種創一『千夜曳獏』

日曜日の朝、ご近所のミツコさんが、プレゼントを持ってきてくれました。ふっくらと秋色に焼きあがったパウンドケーキです。

「これ、お母さんから頼まれたのよ」

母が「四日の朝に持ってきてほしいの」と電話をかけたそうです。

七十代の母は足腰が弱く、一人では歩けません。それほどボケてはいませんが、何をするにもゆっくり、ゆっくり。電話なんて、もう何年も、自分からかけたことはありません。母の銀行の通帳も、財布も、僕が預かっています。母に必要なことはなんでも僕が用意して、二人で暮らしているのです。

電話のそばのメモ帖には、母の震える字で「聡、たんじょう日、ケーキ」と書いてありました。母に「ありがとう」と言いました。

「子どもに何かをしてあげられるのが、いちばん嬉しい」

母は誇らしげに笑っていました。

あの電話のメモは、バースデーカード。切り取って、大切にとっておこうと思います。

ちば さとし　1968年生まれ。歌人・高校教諭。著書に『短歌は最強アイテム』（岩波ジュニア新書）、『グラウンドを駆けるモーツァルト』（角川書店）などがある。

久住卓也さんへ

得田之久

ぼくとあなたを最初に会わせてくれたのは、当時童心社の編集者だった横山雅代さんでしたね。そして五年にわたるお祭りのような楽しい創作の日々から、随分たちます。

当時のぼくは、教科書に紹介されるような真面目な（?）虫の科学絵本を創っていたのですが、何となく行き詰まりを感じて悩んでいました。そんな時、「何か面白い虫の絵本を創りませんか」と登場したのが、笑い声が印象的で誰からも愛されている横山さんでした。

「バチン！」

話しているうちに、ぼくの脳みそを覆っていた鎧のようなものが、音を立てて割れました。

こうして、一年近い推敲の末、「面白い虫の絵本」の企画が出来上がりました。絵描きさんを誰にしようかという段階になった時、横山さんが待ち構えていたかのように、カバンから取り出したのは、あなたのイラストが出ている雑誌でした。ぼくの好きな骨太で温かみのある、茂田井武さんのようなイラストでした。ぼくは即刻「この人にしましょう」と返事をしました。

数日後、我が家にやってきたあなたを見て、ぼくは驚きました。だって、売れっ子でパワフルな漫画原作者（『孤独のグルメ』など）のお兄さんのイメージとは、まるで正反対のシャイで物静かなあなたが立っていたからです。けれども話をするうちに、会話の中にそこはかとないユーモアがあり、まるで大御所の落語家のような、飄々（ひょうひょう）としたあなたを見て、ぼくは絵本の成功を確信しました。

やがて第一作の原画が出来上がりました。あなたのイラストはデフォルメしていながら、見事にその虫の特徴を備えていました。全体に溢れる温かみは、ぼくの想像以上の出来映えでした。

こうして出来た第一作『むしたちのうんどうかい』は、翌年の夏休みの課題図書になり大ヒットをし、その後六冊のシリーズへと発展していきましたね。たくさんの子どもたちに喜ばれた経験は、ぼくにひとつの決心を促しました。「ユーモラスでちょっと叙情的で、子どもの野生を肯定する絵本」、これを僕の今後の絵本創作の姿勢にしようと。久住さん、そして横山さんに心から感謝です。

（とくだ　ゆきひさ／絵本作家）

作家と画家がであうとき 3
『むしたちのうんどうかい』

得田之久・文／久住卓也・絵
2001年9月刊行

「おかあさんとみる性の本」30周年記念インタビュー

一九九二年に刊行された「おかあさんとみる性の本」シリーズは、今年で三十周年を迎えました。絵本作家の和歌山静子さんが、教育者の山本直英さんと作り上げた作品です。小さな子どもと一緒に読める性の絵本として、その先進的な内容とともに、刊行当初から大きな話題となりました。現在に至るまで版を重ね続けているロングセラーに込められた思いを、和歌山静子さんに伺いました。

和歌山静子（わかやま しずこ）

1940年生まれ。日本児童出版美術家連盟会員。絵本、紙芝居、さし絵などで広く活躍し、近年は自作の赤ちゃん絵本を多く手がける。おもな絵本に『ひまわり』『どんどこ どん』（福音館書店）『おとなになるっていうこと』『くつがいく』『くろねこさんしろねこさん』（童心社）、さし絵に「王さまシリーズ」（理論社）、紙芝居に『こねこのしろちゃん』『ころん こっつんこ』［第57回高橋五山賞］（童心社）など多数。

――三十年前、この絵本を作られたきっかけを教えてください。

当時、小学校にはじめて保健の教科書ができて性教育が取り入れられることになって、話題になっていました。私の息子は小学四年生だったんですが、通っていた学校で、性教育の映画を子どもと親とが一緒に観るというイベントがあったんですね。「親子で一緒に観る」って、とてもいいなと思ったのですが、働いて来られない親御さんもいらっしゃいました。

そのとき、「性教育の絵本を作りたい」と思ったんです。絵本なら、親が子どもの成長の頃合いを見ながら、それぞれのタイミングで、一緒に読むことができますから。当時、中高生向けの性教育の本はありましたが、それより小さな子ども向けの本は本屋ではほとんど見なかったんですね。

ちょうどその頃、私の高校時代の恩師だった山本直英先生が、熱心に性教育の普及・研究をしていらっしゃいました。ワイドショーなどに出演されて、子どもへの性教育の是非について議論されているのを拝見していたので、山本先生に会いに行って、お話をしたらすごく喜んでくれて。一緒に絵本を作っていくことになったんです。

――『ぼくのはなし』では、性交の絵も描かれていますね。当時の読者はどのように受け止めたのでしょうか。

まだ時代が変わり始めるというところでしたから、清水の舞台から飛び降りる

ような覚悟もありました。実際、講演で学校に行っていろんな絵本の話をしていて、この作品を読むというときになると、席を立たれるような親御さんもいらっしゃいました。でも、子どもたちはしっかり前を見て聴いてくれる。

「あとがき」に山本先生が書いていらっしゃるように、性交はこの絵本のわずか数ページにすぎません。それと同じように、人生のごく一部でしかないんです。子どもたちはそこだけに注目するんじゃなく、全体のなかでの意味を、ちゃんと受け止めてくれました。

この本を描くより前、息子が幼い頃、私の父、息子の父親、そして恩人の堀内誠一さんと、自分にとって大切な男性が立て続けに亡くなって、落ち込んでいた時期がありました。そのとき息子に「生まれてきてよかった?」と聞いたら、「よかったよ」と言ってくれたんです。「どこがよかった?」って聞いたら、「ぼくがぼくでよかったよ」と答えたんです。私はその頃、しおれた花みたいになっていたのですが、水をかけてもらったような気持ちになって。だからいつか「ぼくがぼくでよかった」という絵本を描きたいと思っていました。

――この絵本では、「ぼく」が「自分はどうやってうまれたのか」というルーツを辿っていって、最後に「ぼくがぼくとしてうまれたことがいちばんうれしい」と話すのが印象的ですね。

卵子と精子が……っていうところからはじまるのがふつうなんだと思いますけど、この絵本では「ぼく」がいまの自分からさかのぼって、みんなに育てられて、祝福されて生まれて、愛し合って命ができた、というふうに辿っていきます。だから自分のルーツとして、素直に受け止められるのかもしれない。この絵本がうまくいくかもしれないと思ったのは、こうやって流れをひっくり返したときでした。

――『わたしのはなし』では、水着で隠れるプライベートゾーンは特に大切だという話、いやなことをされそうになったり、されてしまったときの「NO・GO・TELL」（いやだと言う・逃げる・信頼できる大人に話す）という方法を伝えています。当時とても先進的な内容だったのではないでしょうか。

実は、私は終戦直後、五歳の頃に、防空壕のなかでいたずらをされたことがあったんです。そしてそのことをずっと何十年も誰にも言うことができず、自分を責めてしまった。それが子どもにとって、どれだけ苦しいことか。でも、このときこういう絵本がもしあったら、ちがっていたかもしれない。そういう思いを知っている自分が描いたから、伝わったところがあるのかなと思います。

――『ふたりのはなし』は、どのようにできたのでしょうか。

『ふたりのはなし』は、山本先生がずっと温められてきたお話でした。男女がどうして惹かれ合うのかということを、もとは男女は背中でくっついていた「アンドロギュノス」と呼ばれる一体の人間だったというギリシア哲学の寓話をもとにして語ってるんですね。

先生はこの絵本のあとがきで「この話は、男と女のもとは同じということも語っています」と言っていますが、いま思うと不思議なんですけど、私は意識せず、もともとくっついていたふたりを中性的に描いているんですね。

――男女ということにこだわらず、惹かれ合う二人の話としても読める作品になっていますね。この三冊のシリーズが、三十年間ずっと読み継がれてきました。

発売したばかりの時は売れても、そのまま売れ続けていく本は少ないですが、このシリーズは、長くみなさんに読んでもらって、とてもうれしいことです。私が込めた思いが伝わってるのかなって。

でも、一方で、この三十年、社会の中で性教育についてあまり発展がなかったことは残念に思っていました。また、LGBTQなど、当時は取り上げられていなかったテーマもあります。

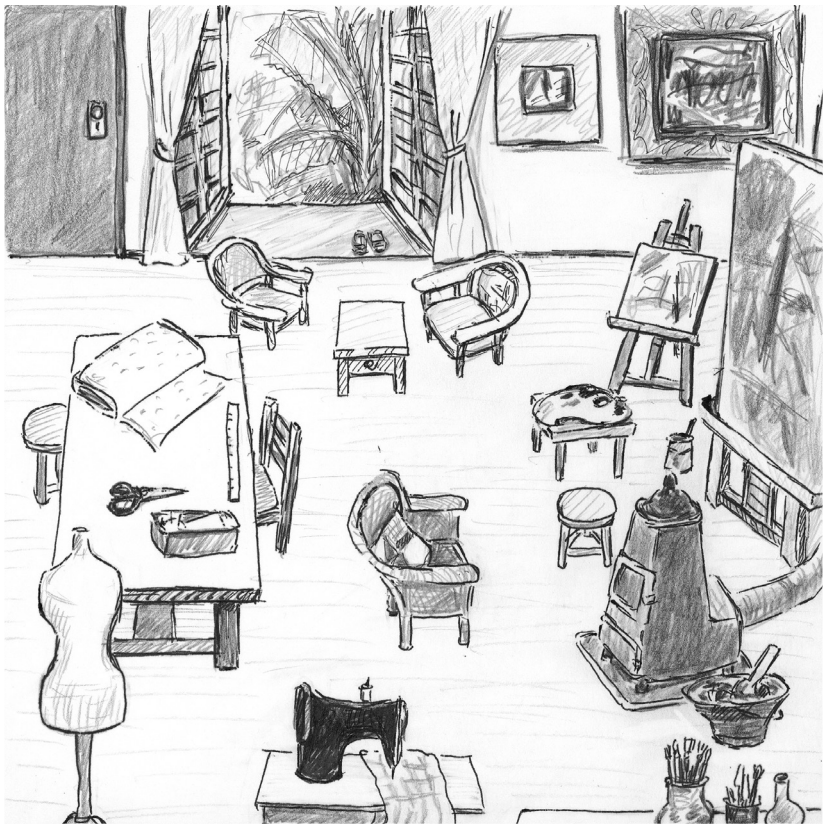
実は、三十年前、息子と性教育の映画を学校で観たあと、家で息子に生理の説明をしたんです。そしたら、息子がニコッと笑って、「やっとあの（生理用品の）CMがなんなのかわかったよ」って、うれしそうな顔をしたんですね。わかるってこんなに嬉しいんだなとその時感じたのですが、生理については「おかあさんとみる性の絵本」ではあまり取り上げられなかったんです。

でも、今年、遠見才希子先生という、やはり性教育の普及活動を熱心にされている産婦人科医の先生と出会って、一緒に『おとなになるっていうこと』という絵本を作ることができました。そこでは、LGBTQや生理について正面から取り上げることができて、運命みたいに感じました。山本先生と遠見先生、どちらも、大人が子どもにどう向き合うかを真剣に考えている方に出会えて、信頼しながら本を作れたことは本当に幸せでした。ぜひあわせて読んでもらえたらいいですね。

（聞き手・編集部）

わたしの原風景 33

西巻茅子
にしまき かやこ／絵本作家



私の育った家にはアトリエがあった。アトリエは父が油絵を描き、母が洋裁をする二十四畳の広さの板張りの部屋だった。天井は高く、天井も壁も漆喰塗りで、北側には天井からのおおきな窓があり、その下に赤い漆塗りの横長タンスが置いてあった。タンスの上には格好いい壺や花瓶が置いてあり油絵の筆が束になって入っていた。南側には両開きのガラス戸があって庭に面していた。夏には開け放たれていて、芭蕉の葉が繁り、ダリアや紅蜀葵（こうしょっき）の花が咲いていた。西側には大きな絵が裏返しで立てかけてあり、大きなイーゼルには大きな絵が、小さなイーゼルには小さな絵が載っていて、父は大小どちらかの絵をいつも描いていた。時々は絵描き友達のおじさんがふらっとやってきて、何やら議論したりしているのを幼い私は聞き耳を立てていた。

母は大きな裁ち台に布を広げて裁断しているか、足踏みミシンを踏んでいるか、お弟子やお客の相手をして忙しく働いていた。私達三人姉妹は大人たちの足元で、布の切れ端で何かを作って遊んでいた。

冬は朝から父が石炭ストーブを燃していて、いつも暖かな部屋だった。夜はストーブを囲んでお芋やお餅を焼いたり、おしゃべりをしたりして楽しかった。お正月はイーゼル等の大きな物は隅の方に片寄せて、家族全員で羽根つきをしたり、裁ち台を真ん中に置いてピンポンをしたりして遊んだ。

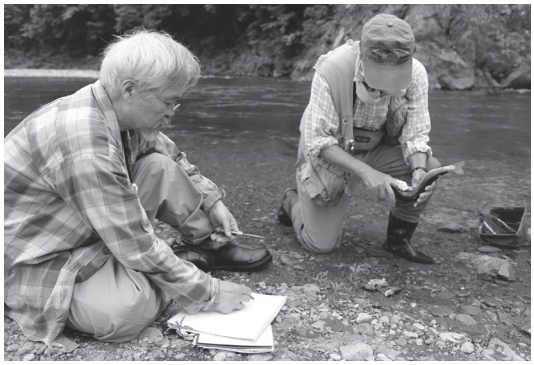
アトリエで家族全員で遊べるということは余所の家にはない、何か特別な素晴らしいことだと思っていた。アトリエにある父の絵、父の集めた家具や花瓶等、母の仕事の人型に着せてある作りかけの絹のドレス等々もみな、余所の家にある物とは違う、センスの良いものに囲まれているという想いで、私には誇らしかった。このアトリエで私は幼い時期のほとんどを過ごした。アトリエで遊びながら父や母の仕事を理解したし、我が家が他の家と違うことも理解したと思う。このアトリエに集まる大人たちの語る言葉に耳を傾けた。私が大人になるための大切なことはほとんどこのアトリエの時空から生じたように思う。

BOOK

抱きしめた絵本

最上一平

いのちが
かえっていくところ
最上一平／作
伊藤秀男／絵
定価1430円
（本体1300円+税10%）


取材中、スケッチをする伊藤さん（左）とマスをさばく最上さん（右）

絵本は、画家さんと編集者と作家の三者で作るもの、とはよく聞く話です。今作の『いのちがかえっていくところ』は、まさに三者が力を合わせて完成した絵本です。

ある日、少年は父につれられて、山深い川に釣りに行きます。そこで、少年は思いがけなく大岩魚（おおいわな）を釣り上げます。ビギナーズラックというやつでしょう。手に汗にぎるとは、このことです。少年は、冷たい体の活きのいい岩魚を手にします。感動します。昼になると、その魚を焼いて食べます。少年は魚の命と向き合うことになるわけです。

絵は伊藤秀男さんです。6月に、名古屋にお住まいの伊藤さんが、東京を流れている多摩川に、大淵の取材に来てくださいました。（絵本の中の川は多摩川ではありません）

伊藤さんと担当編集者の小金澤さんと編集長の大熊さんと私の4人で、ウェーダー（釣り用の長ぐつ）をはき、さおをだしました。マスなどが数匹釣れました。とっても楽しい取材でした。マスは釣れたけれど、伊藤さんから野生の岩魚が欲しいというリクエストがありました。水族館などにいる岩魚ではなく、野生にこだわっておられます。（これは伊藤さんにはないしょにしていただきたいのですが、その時私は心の中で、簡単に言ってくれるぜ！　と思いました。今や野生の岩魚などは、源流部の限られた川にしか生息していないでしょう）

そして一肌脱いでくださったのが、釣り師でもある大熊さんでした。なんと、青森の秘密の川まで行ってくださいました。大熊さんにすれば、特別なお気に入りの川なのでしょう。そして、みごと立派な岩魚を釣り上げ、伊藤さんに届けてくださいました。（見返しに描かれた魚がそれです）

そんなこともあって、伊藤さんが大迫力の岩魚を描いてくださいました。ピチピチ、今にも動きだしそうです。なんとなく、野生の面構えです。美しい魚です。魚だけではなく、川も山も、なんと美しいんでしょう。

少年は初めて岩魚を釣り上げます。たかが岩魚と思われるかもしれませんが、少年は一生この日のことを、この魚のことを忘れないでしょう。父のことも。川も山も。山の音や光までも。

三者が力を合わせた絵本です。私はこの絵本が出来上がってきた時、思わず抱きしめました。ページをめくるたびに、山の気配がし、川の音がします。少年と父の息づかいがはっきり伝わってきます。絵本は楽々と、私を、源流部の川へと連れていってくれたのでした。

（もがみ いっぺい／児童文学作家）

取材とは別の日、
巨大なニジマスを釣った最上さん

11月の新刊図書！

はんぴらり！［増補新版］

はんぴらり！⑦ まねき猫のおくりもの

廣嶋玲子／作
九猫あざみ／絵
定価990円（本体900円+税10%）

ひろったまねき猫を修理し、まねき猫の国にまねかれた鈴音丸。歓迎の宴を襲った敵からみなを救うためにくだした決断とは？　感動の完結編。

願いがかなう自動はんばいき

のらねこライセンス

山口タオ／作
たかいよしかず／絵
定価1100円（本体1000円+税10%）

ホームランがうちたい？　のらねこみたいにのんびりくらしたい？　願いをかなえる自動はんばいきに、おまかせください！

読者の声

あかちゃん　とととととと

おふろにはいろ

三浦太郎／さく・え
定価880円（本体800円+税10%）

図書館で借りて、子どもがとても気に入っていたため、購入しました。野菜のキャラクターの表情が楽しいようでニコニコしながら見てくれます。「らららら」、「ぱぱぱぱぱ」の発音もよく笑います。

（滋賀県　A・O　三一歳）

いしかわこうじ　しかけえほん

みんな　とぶよ！

いしかわこうじ／作・絵
定価1320円（本体1200円+税10%）

ページを開くと、新しい絵が出てきて子どもが笑顔になります。言葉が短いので、子どもに伝わりやすく、声を出して笑うなど反応がいいです。現在六ヵ月ですが、こんなに楽しめる絵本は初めてです。

（広島県　Y・K　四一歳）

絵本・こどものひろば／くれよんのくろくんシリーズ

くれよんのくろくん

なかやみわ／さく・え
定価1320円（本体1200円+税10%）

三歳の子どもにと、両親がプレゼントしてくれました。絵を描くことにあまり興味がなかったのですが、絵本を読んでから、絵を描いてくれるようになってきました。かわいい絵本で大好きです。

（兵庫県　H・A　三三歳）

イラスト／北村裕花

2022年11月15日発行（毎月刊）
母のひろば　第702号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
https://www.doshinsha.co.jp/
デザイン：坂本梓　ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

お ハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

あとがき

●絵本『いのちが　かえっていくところ』については作者の最上先生が素敵な紹介をしてくれましたが、多くの著作がある作家の方が、できた本を「抱きしめた」と言ってくださり、編集者としては本望です。引き締まった美しい文章と大胆かつ繊細な絵の力で「山の気配、川の音、少年と父の息づかいが伝わってくる」絵本になったと思います。どうかご覧ください。 ◉

●秋晴れの日、東京から離れて縄文生活を送っている友人を訪ねました。現代の道具を使わずに、火を起こしたり竪穴式住居を作ったりしている彼に、実際の縄文人が黒曜石を採掘していた跡地を案内してもらいました。一面に散らばる黒曜石は、縄文人が加工をした際に出た破片だと言います。石に刻まれた長い時間の蓄積に、大きなロマンを感じました。 Ⓝ